

李光洙研究について

波田野 節子

一
ご紹介にあずかりました波田野節子です。今日は「李光洙研究について」という題目でお話をさせていただきます。

何を話すか、かなり前に学会に提出しなくてはならなかったもので、とりあえず何でも話せそうなこの題目にいたしました。この題目で話せそうな内容としては、たとえば、どんな方たちがどのような研究をなさっているとか、過去の研究傾向と最近見られる変化、今後期待される研究の方向、日本と韓国における研究態度の違いなどが考えられますが、そのほかに（私の）李光洙研究、つまり私が行なってきたこと、やっていること、これからやろうとしていることなどの個人的な話も可能かと思えます。そこで、ここではこれらを取りまぜて、「私の李光洙研究」といった感じで、以下のような構成で話したいと思えます。

まず前半は、お手もとに配布いたしました略歴を参考に李光洙の生涯について話し、次に、私と李光洙という作家との出会いとその後のお付き合い（研究のことです）、そして私がいま考えていることをお話ししようと思えます。そのなかで、この朝鮮学会と朝鮮学報についても言及したいと思います。なお配布資料では、年齢を使

宜上数えにしてありますが、講演では満年齢にさせていただきます。

二

それではまず、李光洙という作家はどんな人物かについてお話しいたします。略歴をご覧ください。彼の人生の転機になった年を太枠で囲んで五期に分けてみました。

(一)

第一期は、一八九二年の誕生から一九〇五年の日本留学までの十三年間です。彼が生まれたのは日清戦争の二年前です。『我が告白』という自伝のなかで、彼は、自分が生まれたのは「李氏開国五百一年で李朝五百年の命運がつきるとき」だったと書いて、国の運命と自分の運命とを重ねあわせています。生まれた場所は、平壤から百キロほど北にある定州から、南東に入った田舎の農村でした。

『彼の自叙伝』という自伝風の小説に書いているところによると、李光洙の曾祖父は有識のソンピで、孝行息子として表彰されて家には旌門が立ち、その叔父は司諫、その堂叔は承旨、そのまた祖父は正五品の掌令をつとめたことから家は掌令宅と呼ばれ、先祖の余徳で黙っていても員のポストくらいはもらえる家柄であったそうです。これらは李光洙が子供のころに聞いた話ですから、どこまで本当なのかはわかりません。しかし、このあとは実際の話です。李光洙の祖父は酒を飲んで愉快に遊ぶことしか考えない人で、科擧を受けるどころか冠もかぶらず、家を出て妓生の妾といっしょに酒幕を出しました。この祖父は風采もよく、酒好きの風流男児として近隣に知られており、経済的な観念がないとはいえ気概のある人物だったようですが、その息子である李光洙の父親は「無能で役立たずの酒飲み」(と李光洙が書いています)で、十五年間で五回も引越しをして家はほとんど没

落していきまます。なぜ引越しをするかというと、住んでいる家を売ってもっと小さな家を買ひ、その差額で生活するわけです。これ以上小さな家はないという段階に至った最後の家で、父親はそのころ流行ったコレラで死に、母親もあとを追います。十歳の李光洙は外飼いの猫みたいに親戚の家を転々とする半放浪児になり、下の妹はミンミヨナリに出された家で瘦せ衰えて死にました。親たちの世代が無能だったために子供がこのような悲惨な境遇に陥ったことを、のちに彼は朝鮮民族全体の運命と重ねあわせて考えるようになります。

さて、それでは李光洙の幼児期はどんな時代だったでしょうか。一言で言つて、朝鮮で未曾有の大変動の時代です。李光洙が二歳のとき甲午改革で科擧がなくなり、長いあいだ固定していた身分の変動が始まっています。身分制度が不動の時代だったなら、李光洙のような農村の貧しい孤児は、放浪生活のあげくに作男になっていたかもしれません。ところが、この時代に生まれ合わせたために、彼の人生はまったく違ったものになりました。日露戦争が始まるころ、李光洙は東学教徒に拾われて伝令として働くようになるのですが、この時期の東学は「三戦論」という文明開化論を書いた三代目教祖孫秉熙のもとで開化路線を歩んでいました。この路線に乗って彼は一九〇五年の初めにソウルに上り、その年の夏には東学の一進会留學生に選ばれて日本に渡ります。ポーツマスで講和会議が始まろうとしているころのことでした。

朝鮮半島では大規模な人の移動が起きており、このころ鉄道がどんどん延びています。ソウルに向かうとき李光洙は故郷から鎮南浦まで徒歩、そこから火輪船に乗って仁川に行き、その五年前にできていた朝鮮最初の鉄道である京仁線に乗って南大門駅に降りました。そして夏の終わりには、完成したばかりの京釜線に乗って東京に向かったのです。ちなみに、前年十月には五十人の皇室留學生が東京に派遣されていますが、彼らは仁川から船に乗っています。交通手段も何もかもが、すごい勢いで変わっている時代でした。

(2)

第二期は、明治末期と大正時代の二度の日本留学、それから三・一運動をへて上海の臨時政府に参加して一九二一年に帰国するまでの十六年間で、まさに李光洙にとって疾風怒濤の時代です。

十三歳で日本に来た彼は、翌年神田三崎町の大成学校に入学します。ところが一学期が終わったあと東学の分岐騒ぎがおきて学資が中断し、一時帰国を余儀なくされます。この時代、韓国からの留学生はみんな裕福な家庭の子弟たちですが、一進会留学生だけは非常に貧しい階層の出身でした。李光洙のように帰国した者もいますが、多くの留学生が一度帰国すれば二度と留学のチャンスはないと考えて、帰国しないで苦学しようと頑張りました。しかし最後は生活に追いつめられ、ついに全員で断指して抗議文を書きます。李光洙は帰国していたおかげで、指を切らなくてすんだわけです。この事件が大きく報道されて世間の同情をひいたおかげで、韓国皇室からお金が出ることになり、李光洙も国費を得てふたたび留学することができました。

こうして明治四〇(一九〇七)年秋、彼は明治学院普通部の三年生二学期に編入します。大成中学には一年一学期までしか在籍していませんから二年飛び級したわけです。言葉のハンディも入れれば、李光洙がどれほど優秀であったかわかります。明治学院は、過去に島崎藤村や岩野泡鳴を出した文学的な雰囲気のある学校です。それから李光洙が編入学した年の春には、キリスト教社会運動家でベストセラー『死線を越えて』で有名な賀川豊彦が入れ違いで高等部予科を卒業しています。

この中学時代、李光洙は日本語を通して文学に傾倒し、小説、詩、評論を書くようになりました。日露戦争で勝利したあと、魯迅の短編「藤野先生」に描かれているように、日本ではアジア人蔑視の風潮が強まっており、留学生にはつらい時期でした。李光洙が卒業するのは一九一〇年三月ですが、その前年に安重根の伊藤博文射殺事件が起こり、自分たちを見る日本人同級生の目が違ってしまったと、李光洙は回想しています。卒業後は故郷

の定州にある五山学校で教員になり、夏に朝鮮併合を迎えました。このとき李光洙が痛感したのは、きわめて単純に言えば、強いものが勝ち、弱いものが負けるという「優勝劣敗」は真理だということでした。三年後に大陸放浪に出て、今度は上海のイギリス租界やフランス租界で「西勢東漸」を目の当たりにし、再びこのことを実感します。李光洙は、「優勝劣敗」は否定しようのない真理であり、だからこそ自分たちの民族は強くならねばならないと考えますが、それでいて彼の内部の奥底にはこの思想に対する嫌悪の情と、アジアを侵略する西洋に対する反感が根を張っていました。この嫌悪と反感は、ずっとあとになって彼が日本の戦争への協力を始めたとき、米英への敵対意識として復活することになります。

大陸放浪から帰った李光洙は早稲田大学に留学しました。この二度目の留学時、彼は「毎日申報」に多くの論説を書いて脚光を浴び、一九一七年に韓国最初の近代的長編小説とされる長編「無情」を発表することになります。そしてその二年後には二・八独立宣言を起草して上海に亡命し、臨時政府樹立に参加しました。歴史に「い」はありえませんが、このころすでに肺結核を病んでいた李光洙が上海で死んでいたら、彼は間違いなく民族の英雄となったことでしょう。それほどまでに輝かしい時代でした。

(3)

第三期は、一九二一年に上海から帰国してから一九三七年に同友会事件で逮捕されるまでの十六年間で、年齢からいうと二十九歳から四十五歳で、人生でもっとも充実する時期であり、私がつと研究したいと考えている時期です。対日協力を行なう第四期にいたる道筋がここにあるように思うからです。

帰国した李光洙は、上海で知った安昌浩の興土団の朝鮮版である修養同盟会を立ち上げます。李光洙の有名な論説「民族改造論」はこのころ書かれて一部の強い反発を受けましたが、この論説は彼独自の考えというより、

興士団の綱領のようなものです。修養同盟会は三年後に平壤の同友倶楽部と合同して修養同友会となり、そのまた三年後の一九二九年には同友会と改称します。なぜ「修養」の文字をとって同友会にしたのか。この時期には社会主義の勢いが強く、新幹会も創立されており、修養団体のような生ぬるい形態では会の発展は望めないという意見が会員のあいだで強まったためでした。方針をより政治的にするための規約改正を行ない、それにともなつて会の名前も改めたわけです。このとき李光洙は反対しましたが、意見が通らなかつたようです。実際のところ、中学時代から「自己修養」を主張していた李光洙にとって「修養」という要素はとても重要なものでした。また彼は、民族の自強運動は政治的であつてはならないと「民族改造論」にも書いていますから、この方針変更は本意であつたと思います。このあたりのことをもう少し調べたいと考えています。

この時期の李光洙を生活面から見てもみましょう。まずキャリア——これは家族が生活していくための収入にかかわる重要な問題ですが、上海から帰国して二年後に彼は東亜日報に入社しています。入社翌年に連載を始めた「再生」は大ヒットし、そのあとも次々と新聞小説を書いて読者の心をつかみます。彼が書く小説はいわゆる通俗小説ですが、読者たちの熱狂的な支持は、社内でも言論界でも、彼の発言の大きな後ろ盾になつたと思います。一九二六年に編集局長になり、小説のほかに論説、記事、コラムを担当して大活躍をしますが、一九三三年、突然ライバル紙の「朝鮮日報」に移つて副社長になり、世間を驚かせました。地域感情の強い平安道の間人関係とか、そのころ監獄にいた安昌浩の処遇など、いろいろな問題が絡んでいたようです。しかし、その翌年には子供の死を契機にして新聞社をやめ、その後は家で小説を書いて生活することになります。

家庭的には、留學生時代に駆け落ちまでした許英肅と、上海から帰つた年に再婚して子供が何人も生まれました。一九三四年に次男を亡くしたあとは、さつき申上げたように新聞社をやめて、紫霞門外の弘智洞に家建てて引きこもります。やがて妻の許英肅が産婦人科病院を開業し、この収入と李光洙の原稿料が生活の基盤となります。李光洙は「無情」を書いているころ肺結核にかかり、その後もずっと病氣と縁が切れませんでした。とくに一九二五年から二年おきに脊椎カリエス、結核再発、腎臓結核で片方の腎臓を摘出するなどの大病がつづき、何度も死を覚悟したことが、彼の仏教への傾倒と関係しているようです。無一文の孤児だつた李光洙が、度重なる病氣にも負けず、筆一本で生活の基盤を築いて誠実な家庭生活を営んだことが、以上から想像されます。このころ彼は「余の作家的態度」という論説で、「小説は余技」であり、自分は主として原稿料のために書いてきたと書いて、一部の人々の響きを買いました。しかし彼にとって、これは率直な気持ではなかつたかと思えます。「それでは本技はなにかと問われれば、明確な答えはない」と書いていますが、これは検閲を意識したためであつて、彼にとっての第一義とは、やはり同友会を通じた民族への奉仕、彼なりの独立運動であつたと思われるからです。

(4)

第四期は、その同友会の会員たちが治安維持法で大量に検挙された一九三七年の同友会事件から一九四五年の解放までです。話が飛びますが、先日、韓国のあるシンポジウムで、李光洙の対日協力についての発表を聞ききました。発表者は李光洙の論説文を挙げて、彼が若いときから日本にどれほど妥協的であつたかを論証し、その延長として彼は「親日」に行き着いたのだと結論づけました。それで私が、「もし同友会事件が起こつていなくても李光洙は対日協力したと思われませんか」と質問したところ、そう思うという答えでした。

後半でお話しますが、私自身も李光洙の対日協力にはそれ以前の彼の考え方の延長とみなされる部分が多いと考えています。しかし、ある傾向があるということと、実際にそのように行動するということは別個の問題ではないかと思えます。彼が対日協力を踏み切つた決定的な要因はやはり同友会事件であつたと私は考えてい

ます。過酷な拷問のために二人が死亡して一人が廃人となり、保釈された自分は病気に苦しみ、同じように病気で保釈された安昌浩は死亡してしまいます。会員の家族までを含めた多くの人間の運命の責任を負った彼のやむをえざる選択だったと思います。

一九三九年以降、彼はさまざまなメディアに対日協力の文章を書き、率先して創氏改名するなどの対日協力を行ないました。学徒出陣が始まった一九四三年に日本に来て留学生たちに兵志願を勧めたことがその代表的な例とされています。ところで姜徳相先生の「朝鮮人学徒出陣」という本を読みますと、このとき日本に来たのは李光洙と崔南善だけではありません。たくさんの人たちが、やむを得ないこととはいえ、自分たちの後輩や子弟を志願させるために日本に来ました。李光洙と崔南善はこのときに志願を勧誘した多くの人々の象徴にされてしまった感があります。この五年後に「我が告白」で李光洙が勧誘時の心情を弁明しましたが、この傾向をますます固定化したように思います。以前の私はこの弁明を自己弁護だと思っていました。しかし姜徳相先生の本を読んで考えが少し変わりました。志願をしなかった学生たちに対して、受付期間が終わったあとに日本当局がとった残酷な処置を知って、李光洙が憂慮していたことが具体的に理解できたからです。この極限状態で彼らを取り巻いていた事実を、もっと丁寧にみていく作業が必要だと考えるようになりました。

同様に、彼の日本語創作についてもさらなる整理が必要だと感じています。彼が残したおびただしい量の日本語文は多くが時局的な文章で、小説はさほど多くありません。長編は未完ですし、随筆が特にそうですが、単に日本語で書かれているというだけで対日協力とは縁のない作品もあります。発表媒体、書かれた状況(戦時下、状況は刻々と変化している)、内容の詳細な整理と分析が必要でしょう。そのほかに、日本文壇において李光洙はどのような位置を占めていたのか、彼は日本文壇をどう見ており、当時の日本作家たちは彼をどのように見ていたかなど、日本文学と彼の関係の解明もこれからの課題の一つであると思います。

(5)

さて最後の第五期は、朝鮮戦争のさなかに死亡したとされるまでの五年間です。略歴をご覧ください。彼は解放後も休むことなく書きつづけています。もし彼が朝鮮戦争で北に連行されず南に残っておれば、おそらく六〇年代から七〇年代には文壇の長老として大きな業績を残したことでしょう。そうであったならば、現在における彼の評価も変わっていたかもしれません。何よりも、つねに自分の心の奥底にあつて、自らを動かしているものの正体を暴くように描いた彼のことでずから、植民地時代に起きたことを赤裸々に語ってくれたはずだと、残念に思っています。表の最後にあるように、亡くなって六十年後にも彼は「親日反民族行為者」の認定を受けました。

三

李光洙がどのような生涯を送った人物かについて、ざっと紹介いたしました。それでは、次に、私が李光洙とどのように出会って研究を始め、現在に至ったか、また、これからどんな研究をしたいと考えているかを簡単に話したいと思います。

私は大学では日本文学科を出ました。入学年度が六十九年といえ、同じ年代の方々には想像していただけると思いますが、あまり勉学に向いた雰囲気ではない時代で、授業は真面目に受けませんでした。ところが日本語学の講義で、日本語をよく知るためには親戚のような言語である朝鮮と沖縄の言葉を知るべきであると先生がおっしゃったことが、不思議なことにぼんやりと頭に残っていました。大学では副専攻のフランス語のほうを一生懸命やって、卒業後はフランス留学(むしろ遊学)したのですが、フランス語の親戚語であるイタリア語やスペイン語の話者たちが、あつという間にフランス語を話すようになることに興味をもち、日本語にも親戚語と言わ

れる言語があることを思いだして、朝鮮語を勉強してみたくなりました。実際に始めてみると、韓国語はフランス語に比べて確かにずっと簡単でした。

韓国語学習を始めてまもなく、一九八三年の秋のことですが、幼稚園児だった息子を連れて韓国に行きました。思うに私は、最近増えた韓流アジユモニの元祖だったと言えるでしょう。まだ言葉があまりできませんから、韓国では苦勞いたしました。駅員さんが冗談で、自分の知っている唯一の日本語だと前置きして、いきなり大声で「オイ、コッチコイ！」と怒鳴ると、息子がぱっと「気をつけ！」の姿勢をとってそちらに歩いていったので、周りの人が大笑いしましたが、私は複雑な気分になったのを覚えています。扶余に行くために大田に行ったところ、道路がひどく広いので驚き、田舎町である扶余に整然とした大通りとロータリーまであることにも驚きました。のちに大田は日本が作った鉄道都市であり、扶余は日本が神宮を置こうとした計画都市であると知って納得しました。

韓国語歴二、三年のころに、教保文庫で購入した『彼の自叙伝』を読んだのが李光洙との最初の出会いです。李光洙という名前をどこかで読んで知っていたために購入しようです。私は、最初の部分にある「예후라기(ウズラ)」の話に感動しました。桃を食べたいとせがむ幼い主人公のために、年老いた父親が桃をもらいに村へ出かけます。夕方、父を迎えに峠に行った「私」は、そこで卵の入っているウズラの巢を見つめます。もどつてきた親鳥を驚かせるつもりで「私」は石を投げるのですが、それが命中して親鳥は死に、卵も割れてしまします。衝撃を受けた私は家に駆けもどり、母親にその話をして泣くという小さなエピソードなのですが、ウズラの描写の素晴らしさ、貧しく寂しいながらも家族のいる生活のなかでおきた不吉な事件と、そのあと次々に起こる不幸の、胸が痛くなるような文章のうまさ、そのほかに歴史の時間に勉強した「東学」の話が出てきたり、主人公が留学する日本での経験にも興味がかきたてられ、李光洙というより、韓国のこと全体を真面目に勉強したくなりました。

それで一九八六年からしばらく、そのころ新潟大学にいらした糟谷憲一先生の講義を聴講しました。このころの私は「韓国」のことなら何でも知りたいという思いであふれていました。いつか宮田先生が、研究を始めたころは「朝鮮」で頭がいっぱいで、朝日新聞の「朝日」が「ちようにち」と見えたと話されたことがあります。さすがに朝日新聞はアサヒ新聞と読んでいましたが、ほとんどそれに近い状態でした。糟谷先生の講義「朝鮮社会史」は三年か四年つづき、学生は途中で卒業しますが、私だけずっと聞き通しました。『東学乱記録』『肅宗実録』『黄泉野録』を読んで漢文の読み方を勉強したことは、のちに洪命憲の『林巨正』を研究するときにとても役立ちました。

李光洙の『無情』を読んだのはこのころです。この作品は、イ・ヒョンシクという主人公の行動が異常で納得できないにもかかわらず、読んでいて目が離せないのが不思議でした。主人公に反感を覚えるのに、それでいてなぜか同感もすれば感動するという不思議な感覚があるのです。それからもう一つ、この作品を読んでいると、何だか昔どこかで出会ったような考え方があちこちに見られて、これまた不思議な懐かしさを感じました。いつたいこの作品は何なのだろう、なぜ私にこうも訴えかけるのだろうと思ひ、「無情」をもっと知りたいという思いにとらわれました。

そこで一九八七年から週に一度上京して、東京外国語大学の長璋吉先生のゼミで『無情』を読みました。翌年、神田外国語大学に移られた長先生は突然のご病気で亡くなりました。私はひきつづき東京外大で、韓国から帰国されたばかりの三枝先生の授業を聴講しました。それにしても、その当時は東京外大に朝鮮文学専攻の先生方が二人もおられたのですから、私は本当に運がよかったと思います。現在は、当時から見ると想像もできないくらい韓国語を学ぶ学生がふえているのに、文学専攻の教員の数はほとんど増えていません。日本における朝鮮文学

研究の前途のことを考えると暗い気持ちになります。

私は大学院に行つて本格的に研究者の道を歩もうかとも考えましたが、研究者になるなんて夢のように思われましたし、韓国語学習がほとんど行なわれていない時代ですから、研究者では食べていけないだろうと考えました。第一、家が新潟で、おまけに小学生の息子がいるのですから、現実的な選択肢とも思われません。進学はやめて、知りたいことだけ知ろうと決めました。

『無情』はどのような状況で書かれ、発表されたか。『無情』を書いた作家はどんな人間でどのようなように生きたのか。彼が生きた時代はどんな時代だったのか。そうした問題意識をもつて、最初に二年かけて書いたのが、「李光洙の民族主義思想と進化論」という論文です。これは一九九〇年の『朝鮮学報』に掲載されました。これ以前に論文を書いた経験は大学時代の卒業論文だけですが、その経験はとても助けになりました。ここで私の研究方法を申し上げますと、本当に単純なものです。

私は大学では副専攻のフランス語で単位の多くを取得して、ゼミもフランス文学ゼミに所属したのですけれども、卒論だけはやはり主専攻の日本文学で書かねばなりませんでした。卒論指導の先生は、まことに申し訳ないことに名前も忘れてしまいました。その方の研究方法は以下のようなものでした。

- (一) 原典をきちんと読む。
- (二) 他人が書いた評論を先に読んではいけません。
- (三) 作品と向きあつて自分の中に生まれるものを大切にします。
- (四) そのあと、他人が書いたものを読んで整理する。

これだけです。私は最終段階である他人が書いた評論を読むところまでは行けず、原典と向き合つて規程ぎりぎりの枚数を提出し、かろうじて卒業しました。研究とは作品と自分とが向き合うことだといふ大切な原則を教

えてくださった卒論指導の先生に感謝しています。この原則にプラスして、私が当時働いていた不動産会社で身につけた不動産調査と、調査内容の整合性をとらえる技術が私の研究方法です。しかし、これらはとても役に立つたと思っています。

というわけで、卒業論文を書いてからじつに十五年ぶりに書いたのが、「李光洙の民族主義思想と進化論」という論文です。文学作品『無情』の研究になぜ突然「進化論」が出てくるのか、驚かれるかもしれませんが、『無情』を書くまでの李光洙、書いているときの李光洙、すべてを総合的に知りたくなつた、というより知らなくてはならないと考えると、同時に彼が書いていた論説を読んだ私は、そこに表れた「優勝劣敗」思想の強さに驚き、そこから始めなくてはならないと考えたのです。それは明治の日本思想を研究することでもありません。李光洙研究を通して、私は日本の過去と向き合う体験をすることになりました。

どうしようという当てもなく書いたこの論文を『朝鮮学報』に投稿するよう勧めくださったのは、そのころ東京外大にいらした、今は亡き池川英勝先生です。この天理大学に移ることが決まっていた池川先生は、私の論文を読んで投稿を勧めてくださいました。思い切つて投稿した論文が掲載され、このあと『無情』の作品分析まで含めていくつかの論文を『朝鮮学報』に掲載していただきましたが、池川先生が最初に勧めくださらなければ、大学院にも行っていない私には投稿の勇氣はなかつたと思います。また、そもそもこの朝鮮学会がなかったならば、私は研究をしても成果を発表する場所がなく、研究は長続きしなかつたのではないかと思います。池川先生と朝鮮学会に心から感謝する次第です。

四

ここで、朝鮮学会への感謝の念をこめて、学会について少しお話しをさせていただきます。私が学会に入会し

たのは一九八八年の秋ですから、今から二十三年前のことです。その年に初めて大会にも出席させていただきましたが、会場はここから本部に行くときに通過する、あの赤い瓦葺の派手な建物でした。当時、東京には三枝先生が主催する朝鮮文学研究会という口頭発表の場はありましたが、文学の論文を発表する場所はこしかなかった。いろいろな方にお目にかかれるのが嬉しくて、私はこの学会に毎年かならず出席しました。大会のあとの懇親会も楽しみで、そこで歴史専攻の宮田節子先生と長節子先生といっしょに三人で「三節子」だねと笑ったことも楽しい思い出です。

朝鮮学会大会の一日目に公開講演会があるというのは、当時から変わっていません。多くの方の講演を拝聴いたしました。なかでも忘れられないのが、一九九七年の第四十八回朝鮮学会での宮田節子先生の講演「日本の朝鮮支配を考える——二代真柱・中山正善先生を偲んで」です。今回が六十二回大会ですから、もう十四年前のことです。

この講演で忘れられないことは、たくさんございます。宮田先生の魅力的な話し方、素敵なブラウス（あとでお聞きしたところイタリア製でした）、胸もとのアクセサリーまで、今も鮮やかに目に浮かびます。もちろん、もっと印象的なのは先生の話の中身です。先生が大学時代に初めて訪ねた「史料の宝庫」友邦協会の話もさることながら、現在のこの大会の懇親会の前身である（そのころは会費制ではなくて招待だったそうです）「真柱招宴」でふるまわれた松坂牛と松茸入りのすき焼きの話は、先生の話術の巧みさもあつたでしょう、忘れることができません。

それと同じくらい印象的だったのは、私が毎年来ているこの朝鮮学会の創立の時期と由来を知ったことでした。この会場にいらつしやる若い方で、知らない方もいらつしやるかもしれないので、ここでもう一度お話しさせていただきます。この朝鮮学会は、日本の敗戦五年目で朝鮮戦争が起きた年、ついでに申し上げると私が生ま

れた年である一九五〇年の十月十八日に設立されました。私とこの朝鮮学会は同甲^{トシガタ}、同い年というわけなのです。創立の由来についての記憶が曖昧でしたので、今回、確認するために「朝鮮学報」第百六十六輯にある宮田先生の公開講演の記録、それから創刊号にある中山正善二代真柱の巻頭言を読みました。そして学会創立の由来にあらためて感銘を受けました。

この天理大学の前身である天理外国語学校では、京城帝国大学開設の前年である一九二五年に朝鮮語科を設置していました。そして敗戦後に京城帝大から日本人教授が引き揚げてきて四散状態であつたとき、二代真柱はそれらの方々に研究の場を提供し、その方々の協力を得て天理大学に朝鮮学会を設立したのです。この朝鮮学会がこのように歴史的な学会であるという事実に感慨を深くした次第です。巻頭言を読んだ私は、朝鮮学会を設立した二代真柱の思いに感銘をあらたにしました。ここで巻頭言を読みあげればよいのですが、時間の関係もありませんので、要約にとどめます。

敗戦後の日本の世界平和と社会の進歩と文化への貢献は、もつとも近い韓国との友誼から出発すべきであり、そのためには従来のような強弱優劣の誤つた民族の観念を清算して、相互の理解と信頼のうえに親善を築くべきである。その親善の基礎として韓国文化の科学的な研究と韓日相互の文化的結合が必要であるというのが、学会設立の趣旨です。韓国との親善の基礎を「韓国文化の科学的な研究」と「韓日相互の文化的結合」に置く、すなわち「研究を通じた文化交流」のために設立されたのが、この朝鮮学会なのです。この学会の設立の趣旨を、私たち会員の一人ひとりが心に銘じるべきだと思います。

五

ところで、宮田先生の講演記録「日本の朝鮮支配を考える」を読みなおして、じつは私は大きな衝撃を受けま

した。なぜかといえますと、李光洙研究をつづけてきた私が最近になってたどりついた地点が、ここにすてにあったからです。考えてみれば、「日本の朝鮮支配を考える」というタイトルの話がすき焼きと松茸で終わるわけはありません。これは導入部にすぎなかったのに、私はその部分しか覚えていなかったのです。かなりショックを受けました。

それでは宮田先生は何を話されたのか。先生が直接会って話を聞いた総督府の関係者たちには、朝鮮を植民地にしたという認識がなかったそうです。この認識不在はその後清算されずに残り、それが現在もよく起る政治家の不用意な発言につながっている。日本が朝鮮を植民地として支配しておきながら、その責任を感じるどころか、植民地として支配したという事実すら認めようとしない理由は、いったいどこから来ているのか。先生は、そのもつとも本質的な理由は「日本の植民地支配の質」にあったとして、支配の本質である「同化政策」について話されたのです。

同化というのとは一体になること、つまり「内鮮一体」です。日本政府の基本方針である同化政策の根拠は、明治天皇と大正天皇、二人の天皇の詔書しゅうしょにあります。一つは一九一〇年の「韓国併合に関する詔書」で、明治天皇が朝鮮の人民を「天皇の赤子」としていること、もう一つは一九一九年の三・一運動のあとに出された「朝鮮総督府官制改革の詔書」で、大正天皇が日本と朝鮮の民を「一視同仁」つまり臣民として差別をしないと明言したことです。この同化政策が極限に達したのが日中戦争から敗戦までの「内鮮一体」ですが、宮田先生は、当時の内鮮一体論には、日本人側からの「同化の論理」としての内鮮一体論と、朝鮮人側からの「民族差別からの脱出の論理」としての内鮮一体論、この二通りがあったとして、後者の例として李光洙の例も出しておられます。

もちろん、これは先生の名著『朝鮮民衆と「皇民化」政策』に書かれていることで、私もこの本は読みました。それなのに宮田先生がこのとき朝鮮学会で話された内容がこのようなものであったという事実を、私は完全に、

本当にけろりと忘れていたのです。松茸入りのすき焼きのことはあれほどよく覚えているのに朝鮮支配についての話を忘れているなんて、まことに恥ずかしいことです。どうしてなのだろうといういろいろ考えました。その結果、私が先生の講演を聞いた当時、私の問題意識がそこになかったせいだということに思いました。どういふことか、説明をいたします。

六

以前の私は、あくまでも文学作品としての「無情」を研究するのだと言って、彼の対日協力の問題は避けていました。それには当時の韓国の研究状況も関係しています。一九八〇年代から九〇年代初めの韓国の「国文学」研究の世界では、李光洙は「悪者」でした。たとえば代表的な李光洙評伝として、一九八三年に出た金允植先生の『李光洙斗 丑斗時代』があります。この本は李光洙の生涯と作品を知るためには必読の書であり、これがあつたおかげで、私は日本にいながら一人で李光洙研究を続けることができたのですが、じつは李光洙はこの本では非常に悪く書かれています。(もつとも、それほど嫌いな李光洙について、なにゆえこれほど膨大な本を書かねばならなかったのか。この本には李光洙に対する金允植先生の転倒した強い愛情があることを、私は感じています。)

先ほどお話しいたしましたように、作品とじかに向き合うことから始まるのが私の研究方法ですが、当時の韓国ではどちらかという理論によって作品を切り刻むようなやり方が多く、「まず〈親日〉ありき」という先入観をもって李光洙研究がなされる傾向がありました。そのころ韓国で李光洙がどんなふうに見られていたかの例として思い出すエピソードがあります。ある韓国人の知り合いが、私を友人に紹介したときのことです。「この人は李光洙を研究しているんですよ」と言ってから、あわてて、「あつ、だけど初期のころですからね」と付け

加えたのを思い出します。李光洙を研究している、それも日本人が研究しているというだけで変に思われるような空気が当時はありました。臆病な私は、植民地末期のほうには触れずに、初期だけを研究対象にしていたほうがいい、また転向とか対日協力問題は私には荷が重過ぎるから、誰か他の人がやってくれればいいと考えておりました。

そんなこともあって、九〇年代半ばに「無情」研究にひとくぎりをつけた私は、李光洙から離れてしまいました。宮田先生の講演を聞いたのはそのころです。心がそこになく、問題意識もなかったために、この部分の記憶が欠落したのだと思われます。ところが、私が李光洙研究から離れて回り道をしていた九〇年代の後半から、韓国の文学研究状況が変わりました。李光洙を研究対象として冷静に見る研究者が増えたのです。最初の論文である「李光洙の民族主義思想と進化論」を書いたころ、私は、自分が生きているうちにこの論文を韓国の研究者が読む日が来ると考えていませんでした。それが三年前には韓国で翻訳まで出てしまいました。

ここで私が九〇年半ばからだどった回り道(ただし結果的に非常に有益な回り道だったのですが)を簡単に紹介いたします。これは日本での朝鮮近代文学の研究状況の一端を紹介することにもなるかと思えます。

一九九五年に早稲田の大村益夫(以下、敬称を略させていただきます)を代表として、日本で初めての科研費補助をうけた朝鮮近代文学の共同研究「朝鮮近代文学における日本との関連様相」が始まりました。メンバーは三枝壽勝、白川豊、芹川哲世、藤石貴代で、協力者として布袋敏博も入っています。私は金東仁を担当して彼の日本留学時代を調べ、調査しながら留学生たちの足跡がほとんど消えつつあることを痛感しました。

その四年後に、やはり大村益夫を代表として、白川春子と熊木勉が加わって「朝鮮近代文学者と日本」という題目で二回目の共同研究が始まり、私は洪命憲を担当して彼の日本留学時代を調査しました。このとき留学生が日本にいた公的な証しである学籍簿の重要性に気づきました。

二〇〇三年からはその続きで、一人で科研費をいただいて「洪命憲の『林巨正』と『朝鮮王朝実録』』という研究をしました。このとき韓国における洪命憲研究の第一人者である姜玲珠先生に協力者になっていただき、様々なメリットを得たことから、本国の研究者との連携の重要性に気づきました。このころから私は韓国近代文学における「日本留学」という問題を意識するようになりました。李光洙、金東仁、洪命憲という三人の作家の研究をしてきて、どの人生においても、「日本留学」が決定的なファクターとなっていることは気づきましたが、最初はこれを個別的な問題だと考えていました。しかしやがて、これは個別的な問題ではなく、韓国の近代文学全体に押された刻印だと考えるようになりました。

そこで、この問題意識にもとづいて、今度は日本だけでなく韓国の研究者ともいっしょに共同研究をしたいと考え、二〇〇六年から私が代表として三年間の科研費補助を受け、「植民地期朝鮮文学者の日本体験に関する総合的研究」というのをやりました。国際的プラス学際的な共同研究をめざして、大村、白川、芹川、熊木、山田佳子、沈元燮、申銀珠、渡辺直紀、浦川登久恵のほか、韓国から崔元植、徐正子、金榮敏、金哲、李京垣を協力者として迎え、日本文学専門の江種満子や、留学生を研究している武井一の協力を得て、ソウルと新潟と東京で研究会やシンポジウムを開き、にぎやかに面白くやりました。研究というのは個人でこつこつやるだけでなく、みんなで討論して問題意識を深めていくのが楽しいのだということを実感いたしました。

この共同研究をすることで、李光洙の前の時代である開化期に朝鮮から日本に向かった留学生の流れのようなものが見えてきました。また一九一〇年代の東京で李光洙のまわりにいた留学生たち、彼らがおかれていた状況についても知ることができました。こうしてようやく李光洙がどんな状況で「無情」を書いたのかがわかり、彼の体験したことと小説「無情」のフィクションとの関係をさぐって、「無情」の再読」という論文を書くことができたのです。この論文を書き終えるころ、私には李光洙という人物の全生涯を把握したいという欲求が生れて

いました。それと同時に、李光洙の対日協力問題が課題として浮上しました。それで宮田先生のご著書「朝鮮民衆と「皇民化」政策」も読んだのですが、それと同じ内容を十年以上も前にこの朝鮮学会の講演で聞いていたことには、今回まで気づかなかったというわけです。

七

【無情】が書かれた状況を調査しながら、私は、この時期の彼の著作に、植民地末期に日本に対して取る態度と共通する要素が見えていることに気づきました。李光洙は一九一六年の秋から『毎日申報』に論説を発表しはじめますが、最初の論説「大邱にて」が典型的なように、そこには日本におもねるような書き方がされており、そのために以前から韓国で批判されてきました。ところで、この同じ一九一六年の三月に李光洙が「洪水以後」という茅原華山の雑誌に投稿した「朝鮮人教育に対する要求」という文章があるのですが、ここにはその傾向がさらにはつきりと見られます。この投稿文で彼は、日本と朝鮮の教育制度の違いを具体的な数値をあげて指摘し、日本人と同じ「天皇の赤子」である朝鮮人に内地と同じ教育を施すべきであるとして、「同化」の論理を逆手にとつて完全平等を要求しています。ところがそこには、卒業後に平等の資格を与えてくれれば「朝鮮人は眞に皇恩に浴したるを衷心から感謝するであらう」とか、適当な時期が来たら「朝鮮人にも参政権を附與して完全なる日本臣民の列に加えて貰いたい」、そのために教育は日本語でおこなえばよいなどと、まるで内鮮一体の先取りのような文句が並んでいるのです。

しかし、彼の本心はどうだったのでしょうか。翌月、李光洙は同じ雑誌に「朝鮮人の眼に映りたる日本人の欠点」という文章を、今度は匿名で投稿しました。ところがこれは前回とはうってかわつた激烈な日本批判で、同じ人間が書いたとは思えないような文章なのです。たとえば、「日本人は朝鮮人もしくは支那人に対し、傲慢極まりなきに反し、白人種、特に英国人に対する態度の卑屈さはまことに笑止に堪えず」とか、「日本人は啻に朝鮮人を冷遇するのみならず、進みてその職を奪い、その資財を捲き上げて餓死せしめんと努めつつあり。日本人は我々朝鮮人にとりてはあたかも寄生虫のごとし」というような文章です。おそらく前の投稿文を書いた李光洙の心の底には、日本人の朝鮮差別に対する怒りが鬱勃としており、それが匿名という条件のもとで噴き出したのでしょう。当然のことながら、このような過激な内容の投稿はポツになりました。ポツになった投稿の内容を私たちが知っているのは、それが官憲資料として記録されているおかげです。もし先の投稿文しか残っていないかったら、後代の人々はこれが戦略的に書かれたとは考えず、李光洙が日本におもねつてこんな文章を書いていると言つて批判したことでしょう。歴史資料のあやうさを示す一例ではないかと思えます。

李光洙は「わが告白」で、次のように回想しています。

「われわれ朝鮮人の教育機関を作つてくれ」と言いたい場合は、言論人や公職者は「同じ天皇の赤子ではないか、なぜ教育に差別があるのだ」と言わなければ、当時は通じなかった。官公職の朝鮮への制限や差別打破をさげふための公式は、「みんな同じ天皇の赤子ではないか、内鮮一体ではないか、明治大帝の御心ではないか、なぜ内鮮差別をするのだ!」というものだった。

一九三一年に書いた「余の作家的態度」では、小説を書くときは「警務局が許すような材料を選んで原稿用紙に書きはじめるとも書いています。許容された限度内でなければ文章行為そのものが不可能だった状況のなかで、李光洙は自分の主張を合法的に読ませるためのレトリックを体得していききました。こんな状態が文学のあり方を歪めるのは当然です。李光洙は一九三二年に、日本の雑誌「改造」に朝鮮文学紹介の文章を書いています、

李光洙研究について(波田野)

そこには朝鮮文学の発展を妨げる要因の一つとして「朝鮮人になってみなければ想像もできない」ほどの検閲の厳しさが挙げられています。宮田節子先生のいう「民族差別からの脱出としての内鮮一体論」はすでに、彼の大衆時代から始まり、そのあともずっとつづかざるをえなかったわけです。

内鮮一体論をうたい文句にして、というより隠れ蓑にして、民族の実力を養成するというのが李光洙のやり方でした。植民地末期になると、このやり方はそれ自身が目的化していきます。彼は皇民化政策すら民族の実力養成に役立てようとした。『わが告白』のなかで彼は次のように書いています。

徴用や徴兵は不幸なことだが、どうしても避けられないというなら、この不幸を我々の利益となるべく利用するのが上策である。徴用では生産技術を学び、徴兵では軍事訓練を学ぶのだ。我が民族の現在の状況では、こんな機会をのぞいて軍事訓練を受けるすべはない。産業訓練と軍事訓練を受けた同胞が多ければ多いほど、我が民族の実力は増すのである。

しかし、こうやって「実力」をつけた「臣民」たちの数が増えたとき、何が起きるのでしょうか。つづいて彼は書いています。

数十万名の軍人を送り出した我が民族を、日本は虐待できないであろうし、また我々も虐待に甘んじはしない。

彼はここで「虐待(학대)」という言葉を使っています。日本が朝鮮に対して行なったことはまさに虐待であ

ったと思います。強い者が弱い者に対して力行使しながら自分の考えと行動を継続的に押しつけ、弱い者がついに相手の論理に過剰なまでに従うとき、その人は精神的に大きな傷を負い、人間性はゆがまざるをえません。宮田先生は、日本の朝鮮支配で一番の問題は、物質的・経済的なことよりも、朝鮮人の人間性をゆがめ、人格を傷つけたことだと書いておられます。李光洙は若いときから「同じ陛下の赤子なのに、なぜ差別するのか」という論法で「内鮮差別」を攻撃してきました。日本人側の内鮮一体論のまやかしを熟知しながら信じるふりをし、内鮮一体を完璧に遂行することによって、数十万の軍人を作り出し、それを後ろ盾にして「虐待に甘んじ」ない、つまり「内鮮差別」を容認しない臣民を大量に誕生させること、これが彼の望んだことだったのです。「捨て身の戦法」とも言えるものであり、ゆがんだ方法論ではありませんが、それ以外の道はないと彼には見えたのでしよう。「続・半島の弟妹に寄す」という日本語の文章で李光洙はこう書いています。

「大きな指導者になりたけりや朝鮮人の指導者なんて、けちなこと考えないで一億日本人の指導者になりたまえ。大臣になりたけりや大臣に、大将になりたけりや大将にもなりたまえ。陛下にお仕え申上げることなら、皇国臣民たるもの、誰にも許されてあるのだ。日本はすでにわれらの国ではないか。誰も日本をわれわれより奪うことはできないのだ」

李光洙に残された夢は、「日本人」となった朝鮮人が「力」で日本を圧倒することでした。一九四四年十一月、第三回大東亞文学者大会に出席するため李光洙とともに南京に行った金八峰が李光洙から聞かされた有名な話があります。李光洙が『京城日報』に、朝鮮人の額を針で刺したら日本の血が出るくらいに我々は日本精神を体のなかに入れねばならぬという文を書き、それを友人の玄相允が人前で咎めたとき李光洙は返答に窮したという話

を聞いていた八峰が、寢室で二人きりになったのを幸い、真偽を尋ねました。すると李光洙は事実を認めて、こう言ったそうです。

「自分たちは日本人より優秀な民族なのだ。…中略… だから我々は日本人を完全に信用させて日本の憲法を朝鮮でも施行させ、朝鮮人に選挙権と被選挙権を与えさせるのだ。そして京畿道は京畿県、忠清道は忠清県となって、総選挙で朝鮮人がたくさん代議員に当選し、衆議院に出て国政に参加し、ついには朝鮮人の文部大臣も、財務大臣も出るようになれば、そのときようやく日本人も考えるってわけだ。このまま行ったら朝鮮人が日本全国を掌握する日が遠くないとな。そして我々に、昔やった併合を取り消して、別々に暮らそうじゃないかと言うんだ。ところがだ。朝鮮半島を返すから出ていってくれ、こう言われたら我々は、へいやだね。分家するなら、公平に半分ずつだ」と主張する。すると日本人は、そりゃ無理だ、はじめに持ってきた分だけ持ちかえってくれ、欲張りなことを言わんでくれ。こう我々を説得するだろう。そのとき我々は、仕方がないなという顔で、朝鮮半島を日本から取りもどして完全独立をするってわけだ。私は将来をこう見通しているから、いま日本人に朝鮮人を信じこませるためにあんな文章を書いたのだ」

この話を聞いた八峰は呆れて、「なに夢みたいなことを言っているんだ」と言って電気を消してしまったといえます。彼は解放後に書いた回想のなかでこのエピソードを紹介し、その章に「春園の妄想」というタイトルをつけました。しかし「妄想」であれ「夢」であれ、このころ李光洙は本気でこう考えていたのだと思います。玄相允に咎められたとき返答に窮したのは、人前でこんなことを説明するわけにいかなかったからではないでしょうか。

宮田先生が十四年も前にこの講演会で話された「民族差別からの脱出としての内鮮一体論」、李光洙がその実践者であるということに、最近私が遅まきながら気づいたという話をいたしました。私の李光洙研究のこの辺については道が見え始めたところに過ぎませんから、これからもっと研究していきたいと考えています。

八

敗戦によって日本の支配が終わったとき、残ったのは虐待を受けた側のトラウマでした。ハラスメントや虐待はつねにそうですが、加害者には自分が何をしたかの自覚もないというのに、受けた側は被害のトラウマに苦しむことになります。八〇年代から九〇年代前半、私が近づくのが怖いと感じた、韓国のある人々の李光洙に対する憎しみは、いま思うとトラウマの一つの表われではなかったかと思えます。解放から七十年近くになろうとする現在、傷口をありのまま見ることによって克服する過程が始まっています。最近の韓国の研究状況を見ると、その手ごたえを感じます。私の研究生活の残りで、その過程を韓国の研究者とせっせと踏んでいきたいと願っています。それが、中山正善二代真柱がこの朝鮮学会を創立したときの「研究を通じた韓国との文化交流」という目的にも沿うものだと考えております。

(本稿は、第六十二回朝鮮学会大会において公開講演されたものである。)

(新潟県立大学教授)

西暦(数え年令)	李光洙(1892～1950)の略歴
1929年(38歳)	5月腎臓結核で左の腎臓の切除 7月修養同友会を同友会と改称 9月三男誕生
1930年(39歳)	5月李舜臣遺跡巡礼旅行をする 『群像』3部作
1931年(40歳)	1月『東光』続刊 7月万宝山事件 9月満州事変 『李舜臣』
1932年(41歳)	4月安昌浩逮捕帰国 5月山本実彦を知る 『改造』6月号『朝鮮の文学』 9月東京に滞在 『書』
1933年(42歳)	1月『東光』終刊 8月『朝鮮日報』副社長に就任 9月長女誕生 『有情』
1934年(43歳)	2月次男死亡 5月『朝鮮日報』辞任し放浪の旅 9月紫霞門外弘智洞に家を建てる
1935年(44歳)	1月次女誕生 2月安昌浩出獄 4月『朝鮮日報』顧問として再入社 8月許英肅が子連れ日本研修 12月家族に会いに日本へ(～1月) 『異次頃の死』
1936年(45歳)	5～6月家族に会いに日本へ 『改造』6月号に『萬翁の死』 8月南次郎赴任 『그의自叙伝』
1937年(46歳)	6月同友会事件 7月盧溝橋事件 日中戦争 8月病監へ移る 12月病保釈で京城医専に入院
1938年(47歳)	3月安昌浩死亡 4月病床で『無明』と『사랑』を口述筆記 11月3日同友会の思想転向会議を招集、全員で裁判所に思想転向申述書を提出して朝鮮神宮参拝
1939年(48歳)	5月紫霞門外の自宅を売却 12月同友会事件で全員無罪判決/検事側が即日控訴 朝鮮文人協会会長になる 『モダン日本』に『無明』の翻訳掲載 『世祖大王』短編『苦』
1940年(49歳)	2月香山光郎と創氏改名 朝鮮芸術賞受賞 8月同友会事件で全員有罪判決/上告 菊池寛ソウル訪問 4月『嘉実』6月『有情』10月『愛』前編モダン日本社から刊行
1941年(50歳)	3月『愛』後編刊行 11月同友会事件全員無罪で結審 12月太平洋戦争
1942年(51歳)	11月東京で第一回大東亜文学者大会に参加 『元暁大師』
1943年(52歳)	11月半島出身学生に兵志願を勧めるために東京へ 『蠅』『兵になれる』『大東亜』
1944年(53歳)	11月南京で第3回大東亜文学者大会に出席 『四十年』『元述の出征』『少女の告白』
1945年(54歳)	8月解放 『島山安昌浩』『나・少年篇』
1947年(56歳)	『돌베개』『나・스무살고개』『나의告白』
1948年(57歳)	1月反民族行為処罰法により収監 2月病保釈 8月不起訴 『사랑의東明王』
1949年(58歳)	6月朝鮮戦争勃発 人民軍に逮捕されピョンヤンに移送、その後消息不明 『서울』(未完)
1991年	米国在住の三男が北朝鮮に墓参。1950年10月25日、江界移送の途中で死亡との説明を受ける
2009年	日帝強占下反民族行為真相糾明に関する特別法により、親日反民族行為真相糾明委員会が決定した親日反民族行為者301人の1人に認定される

西暦(数え年令)	李光洙(1892～1950)の略歴
1892年(1歳)	陰暦2月初日(陽暦2月22日)平安北道定州郡で誕生
1894年(3歳)	(東学農民戦争 日清戦争 甲午改革)
1897年(6歳)	上の妹が生まれる 8月許英肅誕生 (10月大韓帝国)
1900年(9歳)	(11月京仁線開通)
1901年(10歳)	下の妹が生まれる (8月京釜鉄線工事開始)
1902年(11歳)	夏父母がコレラで急逝 母方の親戚の家を転々とする半放浪生活を送る
1903年(12歳)	このころ東学教徒朴大領の家で伝令として働く
1904年(13歳)	8月定州で進歩会創立 (2月日露戦争 10月皇室留学生)
1905年(14歳)	冬上京 夏一進会留学生として渡日 東海義塾で受験準備 (1月京釜線 12月京義線開通)
1906年(15歳)	4月大成中学校入学 このころ洪命憲が同じ下宿に来る 1学期のあと学費がとぎれて帰国
1907年(16歳)	1月断指事件 官費給付留学生として再渡日 白山学舎で受験準備 9月明治学院中学3年に編入学
1908年(17歳)	4月4年に進級し山崎俊夫と同級生になる 洪命憲と交友 『太極学報』に論説掲載
1909年(18歳)	12月『白金学報』に『愛か』発表 崔南善と交友
1910年(19歳)	『大韓興学報』『少年』に詩や論説を発表 3月卒業 五山学校に赴任 このころ結婚 8月朝鮮併合
1913年(22歳)	11月大陸放浪の旅に出て上海へ
1914年(23歳)	シベリア放浪のあと8月に五山学校にもどる 『青春』に詩や小説を発表
1915年(24歳)	9月早稲田大学予科入学 8月長男誕生 『金鏡』
1916年(25歳)	1月『크리스마스밤』 9月早稲田大学文学部哲学科入学 この月より『毎日中報』に論説を発表
1917年(26歳)	1月『無情』 このころ肺結核に罹患 10月『開拓者』
1918年(27歳)	10月許英肅と北京に駆け落ち 11月第一次大戦終結
1919年(28歳)	2・8宣言起草 上海亡命 臨時政府樹立参加 『独立新聞』編集長 安昌浩の興士団思想を知る
1920年(29歳)	4月興士団に入団
1921年(30歳)	4月帰国 5月再婚 11月『民族改造論』執筆
1922年(31歳)	2月修養同盟会発起 5月『民族改造論』発表
1923年(32歳)	5月東亜日報入社 9月関東大震災 『先導者』『許生伝』
1924年(33歳)	1月『民族的経綸』 このころ日本訪問か 10月『朝鮮文壇』主宰 『再生』
1925年(34歳)	3月脊椎カリエスで手術 『春香伝』
1926年(35歳)	1月修養同友会発足 5月機関紙『東光』創刊 11月『東亜日報』編集長就任 『麻衣太子』
1927年(36歳)	1月結核再発 2月新幹会創立 5月次男誕生 9月『東亜日報』編集長辞任 『東光』停刊(～1931)
1928年(37歳)	病勢回復 『端宗哀史』